

方言助詞集 (接続助詞・副助詞篇)

—九州—

鎌田良二(編)

本稿は『甲南國文 第二六号・第二七号・第二九号』所載の「方言助詞集(格助詞・接続助詞・副助詞篇)」——近畿・(中國)・四國——、「方言助詞集(終助詞篇)」——近畿・四國——、「方言助詞集(格助詞篇)」——九州——」に続くものである。

前回にも記したように、九州の方言研究は九州方言学会をはじめ非常に進んでいるのでその研究書も多く私どもには目を通すことのできない書が多いが、今回は次の書からとった。今回の資料とその略号を記す。

『方言学講座 第四卷』(東京堂)——略号(コ)
『九州方言の基礎的研究』(九州方言学会・風間書房)——
——(九)

『九州のことば』(吉町義雄・双文社)——(九コ)

『日本方言の記述的研究』(国立国語研究所・明治書院)

——(日記)

『福岡県地域方言の研究』(都築頼助・自家版)——

(フチ)

『福岡県内方言集』(福岡県教育委員会・国書刊行会)

——(福方)

『長崎方言集』(本山桂川・国書刊行会)——(長方)

『対馬南部方言集』(滝山政太郎・中央公論社)——

(ツ)

『大分県方言の研究』(三ヶ尻浩・明文堂)——(大分)

『肥後の方言』(秋山正次・桜楓社)——(ヒゴ)

『熊本方言の研究』(原田芳起・日本講義社)——(ク)
『大隅肝属郡方言集』(野村伝四・中央公論社)——

(大隅)

右の略号は、各記述の末尾に記したものである。

なお、『日本方言の記述的研究』の鹿児島県の項で、「鹿児島・(薩)」は同書の「鹿児島県薩摩郡高城村」(上村孝二)の論文。「鹿児島・(西)」は同書の「鹿児島県西之表市西之表」(上村幸雄)の論文からとったものである。

『九州方言の基礎的研究』の大分県の項で「大分・(長)」は同書の「大分県長湯方言」、佐賀県の項で「佐賀・(北)」は同書の「佐賀県北山方言」、熊本県の項で「熊本・(深)」は「熊本県深海方言」、鹿児島県の項で「鹿児島・(岡)」は、「鹿児島県岡児ヶ水方言」の意である。

本稿は接続助詞と副助詞とについて記すものであるが今回の資料の記述から関連する他の類に属する助詞が入ることもある。

資料の原文を全体的にととのえるため記し方を変えたものも多いことをお断りする。

接続助詞

〔目的表示「ながら」「て」と〕

九州総括 動詞連用形に付し目的表示の「ガイ」(語源に二箇助詞合成「が・に」であろうという説はともかく)は享保三(一七一八)年と出でて西國語の手形となるのだが北九州は大体各地の重母音変化に順応して、両豊・両筑・壹対は「ゲー」、肥前「ガー」、肥後「キヤー」である。

同じく連用形を受ける「ながら」は「ガテラ」が多く、「ガテラ」これに次ぎ「ガツラ」は長崎県一帯に多い。

「て」を西南地方らしく「チ」と発する(「ヂ」となる時もちろんある)が、筑前も西半海岸地帯では標準形を出すので区別がつく。

「とて」は「テチャ」「ツチャ」が一番勢力がある。「テム」「テン」も盛んだ。(九〇)

〔九〕

九州総括 体用言を受けて目的を示す「のに」(太郎のに残

す「雪が降ったのに」は標準形「に」が両豊に行われ、訛形として「トニ」(対馬・老岐・筑後・両肥・豊後)「トイ」(筑前)、「テー」(老岐・対馬・両肥)、「ソニ」「ソイ」(豊前西北)等が聞かれる。(九〇)

〔ば〕

福岡。「ときには」「ならば」

げにや(久) さんにや(井) (朝) (浮) (早)

未然のことを推測するという詞なりタと結合すれば既定の推測を表す例えば朝早ウ行クゲニヤは朝早く行くならばの意にてソゲンコツバシタギンニヤは左様な事をば為たときにはの意なるが如し。(九〇)

福岡・

標準語	漢字又ハ漢語	方言訛語及ビ附説
ソ ナ ラ ム ソ レ デ ハ	然ラバ	そんなら(久)(井)(浮)(猪)(福)(糟)(筑)そんなら(久)(八)(浮)(早)(田)ひんなか(京)ひんなか(京) 執モそれならの転訛ナリ又時トシテハモツちや(久)(井)トイフそれではノ約転ナリ越後ニテハそれだから。すつちや

サスレバ	然ルト	又ハそんならトイフ
キハ	そうすりや(久)(早)	
	左様ニすればノ意ナリ	

佐賀(北)・(一)バ

(福方)

ノスナイバ モッテ イタツテ クンサイ。持てるなら
持つて行つて下さい。

シンテ オモ(一)ナイバ デキン コター ナカ クサイ。
死ぬと思えばできないことはないさ。

このように、順接の仮定条件を表わす場合は、「(一)ナイバ」(一)なれば」が用いられる。

ところで、上の「(一)ナイバ」に対して、

アンナレー カシテ クンサイ。あるなら借して下さい。

の「(一)ナレー」のように、「ば」陰在の形で用いられることがある。すなわち、「ば」は、直接する前行音が、いわば本来音(一)ナレ・)である場合は陰在しやすく、転訛音(一)ナイ・)である場合は陰在しにくいという傾向を示している。「ば」が、他の特定の助動詞に接続する場合も、上述と同様の事態が観察される。

ハヨ(一) ガッコ(一)サン イカネ(一) オス(一) ナツ ジャ

1. 早く学校へ行かなければおそくなるぞ。

カズレテ ミンバ ワカラン。かぞえてみなければわからない。

この例文の場合も、「いねば」の「ね」が本来音「ネ」であれば、「ば」は陰在しやすく、転訛音「ン」であれば顕在して、「ンバ」となりやすい。完了の「た」についても同様である。

ユータレー、言ったら。

キヤータイバ、書いたら。

さて、ここに、また、注目すべき用法がある。

キンサツ ハズジャツタイバ ナシ キンサラン カイ。

おいでになる筈だったのに、なぜおいでにならないのかね。

キノ コライタレー モー モドライタ モナー。昨日

来られたけれどももう帰られたよ。

この例文に見られる「イタイバ」「イタレー」は、逆接の既定条件を示すものとみなされる。「ば」の特殊な強調性が、逆接の接続点にも示すに至ったものと解されようか。主として老年層にみられるもので、使用頻度は低い。(九)

佐賀(北)・いギー

アメノ フツギー オヨガレン バイ。雨が降れば泳が

れないよ。

ウミジャ ナシ ヤマギー ヨカ ナイ。海でなく山な
らいいねえ。

「ギー・ギン」は、このように、前項の「いば」類と同様、順接の仮定条件を表わす。

この「ギー」は、もともと、限定を表わす体言「まり」に発するものと思われる。この語に認められる提示限定、強調の表現性が、特定の接続点に生きて、前件後件の相対的な関係の下に、仮定条件として把握されるような表現を生んでいったものであろう。前項の「いば」類による表現が、いわば、より平面的論理的接続関係を表示するのに対して、これは、情的起伏を見せる。その特殊性が好まれたのか、この「ギー」による表現法は、全階層におこなわれ、その頻度は高い。

なお、「ギー」は、「ギン」「ギント」「ギニャー」「ギニャー」などと、強調の心意に応じ、形が伸びてゐる。

サガニ イクギニャート ホニーニ ワラワルツ。佐賀へ行けばほんとに笑われる。(九)

佐賀 佐賀方言の仮定をあらわす「ギイ」「ギー」

ヒトクチャ言ウギイ、ドギャンモンカンタア(佐賀「一

口ニ言ウト ドノ様ナモノカナ)

雨ン降ルギーイカン(佐賀「雨ガ降ルト行カヌ」)

この「ギイ」「ギー」は未だこれという確見は立たないけれども案ずるに「ヨ」「ロ」「カ」の相通から説くべきものではあるまいか。すなわち、原形は「一口テ言ウニ。ドンナモノカ」「雨ガ降ルニ(ハ)行カヌ」という様なところではあるまいかと考えられる。すなわち、 $\text{[i]} \sqrt{\text{[e]}} \sqrt{\text{[e]}} \sqrt{\text{[i]}}$ 而してこれは更に、

雨ン降ルギニヤ行カン

ともいのであるが、此の「ニヤ」は「ナ」の拗音化と解すべく、「ナ」は間接助詞と見るべきで、「雨ガフルニナ行カヌ」と考えられる。(九考)

佐賀・長崎・ギー・ギニヤ

条件を示すのに「ギー」「ギニヤ」を用いる。ヨカギー・ヨカギニヤ(良ければ)

これを「キラ」(島原北部)、「ギリ」(彦岐・島原南部)、「ギント」(島原市)などにするとところもあり、また、東松浦地区・田代島栖地区・長崎県の平戸松地区・対馬などではこの類の接続助詞を用いない。(コ)

長崎・

ヲ又は

ソルバ取ッテオセツケマツセ

(それを取って下さい)(格助詞)

ヲバの意 帽子バカブル(帽子を――)

バ

ガ又は 勝手ニスレバヨカ(勝手にするがいい)
バの意 イテミレバヨカ(行つて見ればいい)

条

件

ヨメバワカル(説いたらわかる)
ヌレバヨール(寝たら癒る)

(長方)

長崎・シタギリニヤ(すれば)、「そうシタギリニヤ事は破れてしまう」(ツ)

長崎・熊本

条件接続(A)「老」「少」

肥後に、 [i] ギー、ギン、ギント、ギニヤが、肥後内に [i] ギントが分布する。他地域にはおおむね [i] トが分布している。

条件接続(B)

「老」肥後内に、 [i] トシャがある。

「少」ほぼ同様に分布するが、南部で希薄になっている。

熊本(深)・バ

マツヤン タイショノ チーテ クットナロバ。(松屋の大将がついに来るのならば)

オキンバ ツマランジャ。(起きなければだめぞ)

モチヤー カマンバン。(もちはかまなければ)

サムカレバ イカンバナ。(寒ければ行きませんよ)

ミナマタカラ オイデナシタトガ コンタドンジャレバ
カオワ シットラスハズ。(水俣ミナマタからいらっしやったのが、

この方たちならば顔は知っていらっしやるはず。)

当方言では、接続助詞「バ」は先行する活用語と融合しないのがふつうである。少年例は、動詞では、命令形に付属することとは形態の項で述べてあるが、打消助動詞「ン」の形を欠くため、「ンバ」の形をとったり、後続の動詞を省いて、さらに、打消助動詞「ン」に直接に続くため、「ンバン」の形を生じたりする点に特色がある。

順接助詞として、キ・デ・バの外に、動詞に付属する「テ」、形容動詞や形容動詞に付属する「シテ」などがあるが略す。

(九)

鹿見島・前提条件順接にギイ・ギナが出水地方に盛んだ。例
行ッギイ(行くなら)寒カギナ(寒ければ)。ほかの地方ではギイは動詞の過去形について、しかも重大な結果を予想するとき、雨が降ッタギイ、大水ジャ。食ッタギイ腹ガイトナルのように用いる。甌ではそれをタギリ・タギー・タギーニヤイという。(九)

鹿見島・ハコデナ√は、常に否定法をうけとめて否定法を予想する接続助詞である。

クワンコデナ| ドン| ナラン。食わないことにはどうにもならん。

「ア」は、「ば」の一態で、よく用いられる。

フレア ヨガテ。降ればいいのに。

「ば」はまた、打消・完了の助動詞と熟合して、「ンニヤ」「タヤ」となり、形容詞について、「ヨガヤ」(よければ)となる。これらは、これ全体として、一活用形と見るのがよいか。

「ば」類のものは、已然形に接続して確定条件を表わす。

アダヤ| ハガ| ワレカレア| イヂユイ| ワル| ナッテ

コラ。わたしは、苗がわるいものだから胃まで悪くなつてね。(九)

(と)

九州総括・仮定「と」は古来記録にも見られず(と・さ・けに)語源説はともかく、しかし、西日本に点散する「トサイガ」が九州では肥後一円のみ行われ「トサイ」「トサイガ」「トサガ」「トサガニヤ」「トサギア」「トシヤガ」など訛形多く、「ト」から下の直拗音の使い方が不安定である。(惣ガントシヤガ、遅シマスバイ)(九コ)

〔とも〕〔ても〕〔でも〕

福岡・チャー(久)(井)(浮)(山)(阜)(とも)又は(ても)の意を表す詞なり複合詞にタツチャ(未定)テチャー(既定)等あり即ち(行きても)イタツチャ(浮)(雨が降るとも)を雨ノ降ッテチャなどいふが如し。(福方)

長崎・「ても」は一般にはタツチャが多いが、対馬・諫早・神代・島原・千々石・小値賀・上五島・奈良尾はテン、福江はタチを使う。

長崎・(方)

デ	モ	言	ッ	ッ	ッ	ッ	オ	ナ	シ	コ	ト	(言	っ	た	っ	て	同
												じ	た				
タ	ツ	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ

事(を)しない)
泣イタツチャ、オイツカン(泣いたつて追付かぬ)

熊本・焼曰く、交際(うまひ)やせんときゃあござり(交際はせずとも、ござれ)で、現代京阪方言の、「言わんとおく」と同じ構造、熊本方言ではなくかすかに命脈を保っている語法。(ク)
熊本・「としゃが」これは熊本県下でも「トシヤガ」「トシ

ヤガニア」「トサガナ」「トサギヤ」と音韻的に不安定で、頭のとをのぞいて、直音と拗音といずれでも勝手に使っている。用法は仮定条件で、

用心セントシヤガナ、アブナカバイタ。(用心しないと危ないですよ)

この語については、吉町義雄氏の「ときいが考」及び「同補正」(方言研究第九・十輯)がある。それを拝借すると

愛知県「ときいが」「さいが」(山口県・岐阜県・滋賀県も)

石川県「たいご」「さいご」「さい」「さいにゃ」「さいにゃ」

山口県「がいが」「ごしょーにゃー」

鹿児島県「とせか」

などかなり広く分布している。筆者が曾て熊本県の例だけによつて、「トサガニア」の中から「サガ」の部分を出出して、「大阪さかい」の「サカイ」と同源の語であろうと指摘した熊本教育第二五八号の記述も吉町氏に引用して頂いたが、このような分布の例を比較してみると旧稿は十分解決されたものとは言えない。
熊本県でも、筆者の郷里阿蘇郡あたりで、「トサガナ」と用法のちがった「ガサイゴ」がある。これは結果が決定的なもの

となることを表現するので一所にならないのではあるまいか。山口県柳井町に「トサイガ」「サイガ」があり、同地に「ガサイガ」があるのは両様の表現が混融したのであるかも知れない。あるいは筆者郷里の「ガサイコ」も「最後」の語原意識に引かれて意味がずれて、第二次的に二つの表現に別れたのかも知れない。

大阪弁の「サカイ」は原因を表わす助詞だが、語原説としての「境界」説は根拠不十分であろう。なる程平安朝末期から中世にかけての、「間」「程に」「処」などが条件法を表わす助詞と化しているが、「間」「程に」は「經由」を示す意味から原因結果を表わす意味に十分自然な展開を見ることが出来る。「処」でもその出発点が示されて、結果をそのように用いた語例が全くない。そこで筆者は、「サ」は「ソヤ」また「ソレ」、ともかく指示代名詞的機能を含むもの、「カイ」は「カラ」「ケレ」等と同系の語と考えたい。「ト」がその上に加わってそこで仮定の意味が生じたものである。

トサガナ↑ト・サカイ・ニハ

トジャガ↑ト・サカイ

拗音化する傾向が根強いのは、原語の中に「アイ」を含んだ語根を有することを思わせるものである。(ク)

鹿児島・(薩)グレ

動詞の連用形に付け、後に打消の意味が来る。東京語の何々しないでもよいの意味を表わす。例 ゼンナモドシ グレイラン(お金は返さなくてもよい)。(日記)

鹿児島・宮崎南部・ドン

共通語の「でも」に相当する場合(例、チャ・ドン・ノモカイ「茶でも飲もうか」と、終止連用形に続いて既定の逆接条件句を作る場合(例、アメジャッド・ニ・イタツコンナラ「雨だけれど行つて来ないと」とがある。なお・ドンカラ・ドンカランは後者のドンと同じ用法を持つ)。(コ)

〔て(で)〕

九州総括

ドウゾ、(買) コウチ、(興) クシナハリ(熊本)「何卒買つて下さい」

ドギャン、ショッカ、ミチミイ、(熊本)「どんなにしているか見て見よ」

ダマーネー、コシラヘチ、ドキイ、行クシナエー(大分

「大層めかして、どこへ行きますか」

甲、ドウナ、イッショイ 行カンナエー。

乙 ソウヂャナァー 一ッ連レチ。 イッチ。 モラウカ。

(大分「一緒イ」は「一緒ニ」の「ヨ」の「ヨ」が脱落したもの)(九考)

九州総括・「用言十打消助動詞(ぬ)」に接する時、口蓋化して「ヂ」となる傾向がある。而してその際、打消助動詞「n」が脱落しがちであり、「ヂ」は長音化し、或はさなくとも頭音「d」を脱落して「ジ」となるのが普通の様である。

(イ)学校サン往カシ遊ビヨル。

(ロ)学校サン往カシ遊ビヨル。

(ハ)学校サン往カシ遊ビヨル。

右に示した(イ)(ロ)(ハ)の四例はいずれも現在熊本に用いられているもので、或は(イ)、或は(ロ)(ハ)という様に随時随意に用いられているのである。(九考)

大分(長)・イチ(チエ)

フナナ マー キオ ツケテ イチ キナー。ではまあ

気をつけて行っておいで。

ドゲー シチ タブルン。どうして食べるの。

アユージ イチ キナー。歩いて行っておいで。

ヨンジ キチ クレナー。呼んできて下さい。

この例文にみられるとおり、「て」に相当するところには、「チ」(まれに「チエ」)が観察される。なお、長音および発音に接しては、「ジ」(まれに「ジェ」)の観察されるのが普通である。

さて、これらの「イチ」「イジ」に、

ワリー コトンジョー シチカラニ。悪いことばかりし
て。

アシガ イトージカラニ スワリキラン。足が痛くてす
わることができない。

のように、「カラニ」が添加して、接続の姿勢の明らかな、特異な発展を遂げた修飾部も成立している。(九)

大分・打消しの中止、たとえば「行かないで」の「いないで」にあたる言いかたは、一般に、イカンデ、イカンジのように、シデを動詞未然形に接尾する。変わったものに、日田の行カナナの「ナナ」がある。

長崎・カラニ・カラント

ニゲタルシテカラニ出テコン(逃げたりして出て来ぬ) 泣

イテカラントオカシカッタ(泣いたりして可笑かった)(良方)

鹿児島・宮崎南部・セエ

共通語の「て」と同様の働きをする(例、コッチキチセエカ

タツミレ「此方に来て語って見る」ほか、方向、比較の対象、受身・使役表現における動作の主体などをあらわす。例、ミッセイッキャンセ「右の方にお行きなさい」(コ)

鹿兒島・

「て」は、「ミンミレ」(見てみる)。「セツケー」(して来い)のように「ン」「ッ」(促音)にもなる。

「カダツ」は、「アウンカダツ プナ」(歩きながら食うな)のように用いられ、「つつ」に対応する。(九)

鹿兒島・(岡)

セーという助詞を共通語のテにあたるところに用いる。鹿兒島地方が本場で日置郡・掛宿郡の一部、大隅では南の辺境を除いた地方に分布。シッセー(為て)、オイセー・オッセー(居て)、ユッセー(よくて↓ようて)のように連用形接続だが、促音する傾向。これはテの訛形でなく、実は、接尾語「さま」(…するや否)の変化したものである。(九)

〔62〕

長崎・トデ

「で」の意……聞エントデ困ツトル(聞こえないので、困っている)(長方)

熊本・「デ」は熊本方言では代表的ではない。しかし、葦北郡球磨郡及び天草郡の南部で用いられる。大阪府下ではこの「で」がかなり勢力があるようだし、それだけ近畿方言系と見なされてもよいものである。「それは何々にて」「これは何々にたるにて」と原因を説明する形から、原因を示す「で」語法が発達したと見るのが一番無難である。「それで」「ので」等現代語法の本流になっている。(ク)

鹿兒島・(岡)

打消に接続する法「行かないで戻った。」の、ないでにあたる言い方には、行カジ、行カンジ(二重否定)が普通。薩摩の出水・川内地方では行カンジという。種子は行カンジ、屋久は行カージが主、甌は行カジンが主である。いずれも「行カズニ」の訛形に過ぎない。(九)

〔から〕

九州総括・共通語の「から」に相当する順接の事象を、ひろく概観してみよう。肥後および日向北半から北九州北部一帯では、「ケン」「ケー」「キー」類が、ひろくおこなわれている。

さて、「ケン」は、主として肥筑地方に、「キー」は北九州から豊後、日向北部にかけて分布する。この両事象の接触地帯とみ

なされる肥筑寄りに、「ケー」が散在している。「ケー」は対馬にもみられる。

南部は、薩隅地方中心に、「デ」が優勢である。この「デ」は、肥後南部（天草を含む）一帯へとたどられる。なお、日向南部地方に「カラ」類が存する。肥前西辺および天草北部の「セン」も、注目に値しよう。（九）

九州総括・順接「から」「少」両肥に「ケン」、両豊筑前に「キ」、キが分布する。薩隅に「デ」、日向・種子・屋久などに「カラ・カイ」がある。なお、肥前西および天草に「セン」が点在する。（九）

九州総括・理由「から」、理由を示す「から」は標準形よりも西日本的の（古語「けに」との関係はともかく）「ケン」が圧倒的であって、近松門左衛門『大隠冠』正徳三（一七一三）年の唐音に拾える訛形「ケー」「ケンデ」「ケニ」など所により人により区々だが「キ」となれば両豊地方の標識としてよい。また（古語「そえに」との関係はともかく）「スエニ」「セン」が彦岐や天草で聞かれる。（九）

福岡・原由関係を示す「から」——「ケ・キ・デ」「それだから、こうなんだ」「可笑しいから笑う」等の如く、經由・理由を示す「から」は東京及び関東でも何れかと言えは通用語

と見られているが、これに相当するものに、肥前など九州西北部に多い「ケニ・ケン・ケイ・ケ」が、やはり筑前・豊後等では一方に「キニ・キ」が行われていて、やはり南九州の「デ」と対立していることは今後大いに吟味して見る必要がある。（フチ）

福岡・「から」相当の接続助詞はケン類である。筑後と筑前西部ではケン、その東側ではケー・ケが一般でケンは老人語化した点がある。なお、「(a)・(o)」が「(i)」となる地域ではキとなる地点がある。累加表現として筑後にケンデがあり、豊前および豊前寄りの地域に「ものだから」に近い「ナケ」「ナキ」が老人語として存する。逆接確定条件の接続助詞は筑前・筑後ではバツテン・バツテンカ・バツテ、豊前と筑前東地域ではケンド・ケンドガである。バツテンの出自が「ばとて」ならば、逆接仮定のタテチャ・タツチャ・タチャの出自は「たとては」であろう。豊前域ではタチとなる。共通語の「と」・「ば」相当の表現として、西南域にユータゲ・ニヤ・困ル、豊前域にユーチカラワリーと、ゲニヤ・チカラ（てから）がある。（九）

福岡・ケンデ（久）（井）（瀬）（山）（池）、ケン（久）（井）（瀬）（糸）（福）（早）、ケー（浮）、ナケ（井）（浮）、キ（浮）（鞍）、ナキ（浮）、ケンガ（山）（八）、ノツテ（福）

(筑)(糸)

ケは古語「かれ」(故)の約にてキはケニの約転なるべしケンデはケニテ。ノツテは「によりて」の転化なり備中国にては「故に」の意をケンまたはケニという地方あり。

以上の助辞は「それ故に」(それであるから)という複合詞として用いること多し、即ち左の如し。

アリケンデ(久)(井)(瀧)(八)、ソウジャケン(瀧)、ソレジャケニ(槽)、ソシナケ(井)(浮)(朝)、ソケナケ(朝)、ソシナキ(浮)、ソリキ(浮)、ソレジャキ(槽)、ソレキ(浮)、ソレジャキ(槽)、ソシジャキ(宗)、ソシジャカラ(槽)、ソシデキ(宗)、ソリケンガ(八)(山) 肥後の玉名郡にては、「それ故に」ということをホルケンガという。(福岡)

佐賀・順接「から」に相当するのはケンで全県下に行なわれる。鳥栖地区ではケともなる。「なら」に相当するギ・ギニャー、例、スツギーするなら、は東松浦地区(浜崎を除く)、鳥栖地区以外に広く用いられる。「て」に相当するところをチとするのは佐賀東部地区の一部、鳥栖地区、東松浦地区の一部である。(九)

佐賀(北)・接続表現

接続助詞によってしめくられる修飾語の、おもなものをと

りあげる。

ノケー・ケン

ヒノ | クルツケ | ハヨ | モドロ | イ。日が暮れるから早く帰ろうよ。

ヤカマシカケン | アツツ | アン | イカイ。やかましいからあちらへお行き。

「ケー・ケン」は、順接の既定条件を表わす。二者のうちでは、「ケン」の方が普通におこなわれる。なお、

アメン | フィヨッ | ケンガ | イカレン | ジャロー。雨が降っているから行かないだろう。

ケツアツノ | ヒッカ | ケンガ | ハマットー。血圧が低いので精出している。

この例文のように、「ケン」が「ガ」を伴って「ケンガ」としておこなわれることがある。この「ガ」は接続、修飾の構えに応じて添加されていったものとみなされる。この「ガ」には接続の積極的な機能性は認められない。(九)

佐賀・長崎・「から」——「ケン」

理由を示す「から」に対応する「ケン」がある。ヨカケン(良いから)

地方によって「ケー」「ケーニ」ともなるが、これを「セン」とするのが平戸北松地方や島原北部地区である。スイカセン・シーカセン(酸いから)(コ)

長崎・順接の接続詞「から」にあたる方言は、一般にケンが多いが、対馬はケ、壱岐および平戸地方はセンがよつうである。ほかに島原にセン、上五島にテンが、福江にトデがある。(九)

長崎・ケン・ケンデ

「から」「故に」イカンケン知ラン(行かないから)。ヨセンケンワカラン(読まないから)。

「だから」「であるから」アータノケン言ウバッテン……貴方だから申しますが……

「原因」雨ノ降ルケンコン(雨が降るから、行けぬ)。病氣ノケンコラレン(病氣だから、行けぬ)(長方)

長崎・(対馬)ケ「……から」「……故」

「斯ウ言ワムスモンジャケ」「行テ来ルケ」「常ガ常ジャケ、ソウ疑ワレルノモ無理ワナイ」(ツ)

大分・原因・理由を示す接続助詞、ほぼ「から」に相当するものには、「けに」に由来するキー、ケー、ケンが広く用いられる。キーも、県北で、ウチンモンガ イチキー チュータナキー イキヨル タイ(中津江、少年)のように使われ

る。カラは東国東以外には用いない。ほかに、東国東にホデ(ほどに)、県南奥地の所々にノッチェ(によって)などがある。いずれも終止形を受ける。(九)

大分・KuとnoTe。既定の順接条件を示す接続助詞に、Ki, noTeの二つがある。/ *ku wa tenki ga ii; ki, monjuu hoss.* / 「今日は天気が好いから扱を乾そう」/ *koosian, ame n huru noTe saka daken.* / 「ことは雨が降るので(から)作はできなく」/ *kon toshijori muii ii huTka (福が) kia N dja,*

wakai (wake) utii ku o mi-joru kii naa, / 「この老年になつて好い事が来たのだ、若いうちに苦を見ているからなあ」この二つの助詞の間に、東京語の「から」と「ので」の別に当たるような差異があるかどうかは、また確かめ得ない。(日記)

大分・ケン(から)ソリケン(そうだから、西)(全)。キー(から)ジャキー(であるから)(野)(直)(玖)(阿蘇)(大方)

大分・接続助詞によってしめくられた修飾部をとりあげる。キー・ケン

カネが イルキー シンニ カエタンジャ。金がかかるから新暦に変えたのだ。

カシチャルキー ヨゴサンジョッテナ。貸してやるから

よごさないでね。

順接の接続助詞、「キー」によってしめくくられた、修飾部である。

「キー」は、一般に頻用される形であるが、また、

ヤツパー モトガ イリマスケン アンタナ。やはり
もとがいらすすからねえ。

のように、「ケン」の觀察されることもある。「ケン」は、比較的新しく、「キー」よりも上品だとされる。(九)

宮崎・順接「から」にあたるものとして、日向の最北部ではキー(肥後色の強い所はケー)、その他の地域はカラ、或はカラに類似したカリ・カル・カイなどを使用。諸県では北諸県郡・市はジ、西諸県郡・市はデを使用。(九)

宮崎・理由の「から」に当たる^カは終止形に接続する。日記

熊本(深)・キ・デ・イキデ

接続助詞キ・デ・イキデなどが前件・後件を順当に結びつける表現をつくる。

ーキョーワ ヌツカキ アスビギヤー イコクター。(今日
はあたたかだから遊びにいこう。)

||ジエンノ ナカイキ イクナイ。(カネがないから行かな

い。)

III オルガ イエンヤバン シトツデ ワルガ イタツケー。

(おれが留守番をしているから、お前が行っていい。)

IV シエンシエイノ タンネテ コラスデカ ジャツデチュ

ー。(先生が訪問して来なさるからという話だ。)

V オルガ イクイキデ マットレゾ。(おれが行くから、待

っておれよ。)

VI ワリヤー バカジャツデカ シツチャケタ。(お前はほか

だから、落第した。)

当方言のこの種の順接助詞として、各年齢層に一般に用いられるのはデまたはデカである。キ・イキ・イキデは少年層にのみ用いられ、その使用は、かなり新しい。イキ・イキデのうち、イキデイは在来のデと新しいキとの重合形と考えられる。イキ・イキデは、ともに、ふつうは形容詞やカ語尾形容詞にか付属しないので、実は、カル語尾にキ・キデが添えられたものと解釈されるが、特殊に文例Vのように、イキデが動詞に付属することがあるが、カル語尾の衰退に依じて、二次的にイキデが分立したものと思われる。(九)

熊本・順接は老少ともにケンを基本とするが、天草・芦北・球磨郡ではーデ(ジャツデ)がむしろ基本である。またーデは

順接の外に、軽い余情的な感動一般を表現するにも広く用いられている。また天草下島の芥北町(旧富岡町など)、五和町には、*い*センがあり、少年層には多少は衰えながらも老少を通じて用いられている。(九)

熊本・「から」の意味の「ケンはどうか、これも大分県は母音が狭くなって「キイ」であり、熊本県でも阿蘇郡は「ケー」で、いくらか狭い母音になっている。その他の県下の大部分は「ケン」である。中国あたりではやはり「ケニ」を聞くようだし、四国に「ケレ」が多いこともよく知られている。これらは「から」系に一括できるかどうかを解決しなければならぬ。「から」の方は語史が明瞭で、古語では「みづから」「おのづから」も原由の意味があり、「おのが身のから」という用例もあるから、もと名詞であつたらしい。「ケレ」は恐らく「ければ」の語末消失で、「から」と別系である。

平安朝の文例に、この原由を示す接続法を「けに」で示した所が、かなり多く見える。

伸べ縮めのいと疾かりしけぞや(栄花物語・見はてぬ夢)
年ごろかゝる事やはありつる。故殿の一所おはせぬけに

こそはあめれ(同上)(ク)

熊本・熊本県では天草郡の一部(主として下島の北部)にだ

け

今日ワ、チピンカ、サムカシエン、ハオリバ、キテイカンバ
(鬼池村採集)

という珍しい形がある。この形は彦岐嶋にもあり、長崎県ではまだ外にもあるらしい。天草に「ジャッセン」という形もあることから考えて、「さかい」系の「さけ」「すけ」などの音転と考えるよりも、もつと古い平安朝の「そまに」(接続詞)から発展したものと考えたがよくはあるまいか。(ク)

熊本・「ケン」阿蘇北部「キ」「ケー」阿蘇南部「ケー」

1、雨ン降ルケンハヨモドロ

これは説明の要もあるまい。これに「ガ」を添えても意味に増減はない。

2、モウジキイクケンガ。

断定の助動詞「ダ」「ジャ」につくと

3、御亭どんのグシャッペだるけん……(俚謡)

4、今日ワ、日曜ダケン……

「ジャルケン」「ジャケー」これらは地理的な対応である。

条件法であることは違ひない、単に強めた表現になることもある。

5、「アタシナラヨゴザリマスケン」

「ぼってん」がすねて見せるなら、これはしおらしく謙遜してみせるといった論理を超えた表現性が示されることは珍しくない。

「ケン」に対応する別の言語圏の語は、天草郡下島北部の、

6、寒カセン……

葦北郡球磨郡の

7、サミデ火ヲモツケ（寒いから火を持って来い）（球磨郡誌）

8、オイガ行タデヤイヤッタゾ（俺が行ったから下さったのだぞ）（〃）

9、オイガ行タデヤ（俺が行ったからなあ）（〃）

括弧内は筆者の訳である。これも肥筑方言要素でないこと前にのべた「ドン」と同じである。（球磨方言を全体として肥筑方言のやや異質的な漸移地帯とするか、薩隅方言の特殊な区劃とするかは、まだ現在熊本市方面の言語がどの程度浸潤しているか若い世代の言語を調査してから定めたがよい。老人の言語を主とすれば、肥筑よりも薩隅の方にはるかに近い。しかしやがて言語状態は大きく変わったものになることは疑いない）

この「け」は「気」に通ずるもので原因よりも結果を指示している。方言の「ケニ」「ケン」「ケー」は、この平安朝の口語

に見える形から流れている。「から」「けに」「ければ」「ほどに」「間」「に依って」等別の語原をもつ語形が競争して次々交替する所がこの種の語法的要素の上に見られる一特色である。音通説を濫用することはいましめるべきだ。（ク）

鹿児島・順接の「から」相当のものに「デ」がある。「カレナ」は「からには」であるが、「カラ」単独で用いられることはない。コカレナ ヨガモンニユ コワンニヤ。（買うからにはいいものを買わなくては）（九）

鹿児島・順接「から」。薩隅本土ではデが優勢。部分的にはデエ（薩摩半島南部）、デ（大隅南部）があり、デーが甌に、デカが長島にあり、出水地方は元了感で導くときは、モンデをよるこぶ。種子・屋久はカラである。今回の調査で屋久（地点一八）にテー（短くテとも）という形が発見された（来ッテ マッチョレ）が、これはトニ（のににあたる）の訛りで順接として転用されたものと思う（佐賀県武雄市、五島福江市にも同様のテの用法がある）。屋久島では地点一八ばかりでなく他の地点でも使われることが、その後明らかにになった。長島地方には、モノ（もと逆接「のに」の義）を順接に転用するところがある。横着カモノカクサンガ（〜から仲間に入れないよ）。

（九）

鹿児島・接続助詞の見られる修飾部

当方言には次のものが認められる。

(順接接続)

いデ(から)、カレナ(からには)、いコデナ(ことには)

いバ(ば) い「ンニヤ」(ば) い「ヤ」(たら・から)

いア(から) い「ンナ」(から)

いと(と)

(逆接接続)

いバツテン・いバツ・いバツテンカイ、いドン・いドンカイ

(けれども)

いテ(ー)・いと(のに)、いコデ(ー)・いモンニユ(の)

に)、いニ(のに)

いとん(ても)

いデン(でも)、いバ・いバツ(でも)

いちユ(たつて)、いデチュ・いバチュ(からとて)

いカダデ いヨヒデ (くせに)

カダッ いヨッゼ

いとゴイカ(ところが)

(列叙)

いテ・いデ・いッ・いン(て)

いシ(し)、いガ・いガ(が)

いカクダ・いカダッ(ながら) (九)

鹿児島(薩)・デ 原因・理由を表わす。例、寒カダ仕事ハ

デケン。(日記)

〔62〕

佐賀(北)・いとコイ

タイテイ ベンキョーシタトコイ シェーシェキノ ユー

ナカッタ。(そうとう勉強したのに成績がよくなかった)

この「トコイ」は、例文のように、逆接の既定条件を表わす。

さて、「トコイ」には、また、一方に、次下のような順接の

用法も存する。

キツカトコイ ハヨー ヌツ クシャー。(苦しいから

早く寝るよ)

モーヒノ クルトトコイ シゴトバ ヤメン コテ。

(もう日が暮れるから仕事をやめよう)

この「トコイ」は、本来、いわば、順接・逆接などのわくによつて拘束しきれない、幅広い接続機能をもつて立っていたと解されるが、現下にあつては、一般には、逆接と受けとれる方向に、その機能が、限定されつつある状態である。(九)

長崎・トニ

ノニの意……折角オイデマシクトニ……(折角おいでになり
ましたのに……)(長方)

長崎・

雨ノ降ットコロニ……

トコロニ

ノニ又は

(雨が降るのに……)

トコレ

ニモ拘ラズ

寒カトコレ……(寒いのに……)

(長方)

大分・(長) ーノニ

アテイーニ ハタラク ナー。(暑いのによく働くねえ)

アメガフルニ デチ イッタ。(雨が降るのに出て行っ

た)

「のに」に相当する逆接の修飾部である。(九)

熊本・ニ・テー・テカ

接続助詞ニが逆接助詞として用いられるが、多くのばあい、

形式名詞トと結んだテーの形で用いられる。少年層では、単独

にニだけを用いることがない。できあがったテーは、更に、テ

カ・テモ(チャ)の形を作つて用いられたりする。

オレガ オソユルニ ワカラントジャモネ。(おれが教え

るのに判らないんだもんなあ。)

ネダンノ タツカテー ナシ カワツタカナー。(値段が

高いのに、なぜ買われたのですか?)

シェイケツケンサガ イツジャツテカ チヤント シノ

ベトカンバ。(清潔検査がいつになつても、ちゃんと大掃

除しておかなくちゃ。)

接続助詞として、ガが単独に用いられることはなく、常に、

バツテガの形でしかあらわれない。(九)

鹿児島・

「バ・バツ」は、必ず打消法をうけて、カグサンバツヨ

ガモンニユ。(随さなくてもいいのに)のようにあらわれる。

もとは「(ね)ば」であろうか。

スツチュダグチュ サセン。(するといつたつてさせんぞ)の

「チュ」は「デ」「バ」と複合して「からとて」の意味で用い

られる。逆接群には、形式体言の「こと・もの、かた・とこ

ろ・ようす」が関与しており、注目される。

「ニ」は、動詞について「アメンフイ」(雨が降るニ)、形

容詞について「サンケ」(寒カルニ)のような形であらわれる。

(九)

鹿児島・(薩) テ 確定条件を逆態的に表わす。例、雨が

降ッテ出テ行タ。(日記)

〔ながら〕

大分(長)ーチカカジ

アリーチカカジ パンヌ クー。(歩きながらパンを食べる)

モチュー クーチカダシ シラベナサリー。(餅を食べながらしらべない)

動作の同時並行を表わす修飾部である。まれに「アルクカタジ」とか「クーカタジ」とか言うことがある。この修飾法は、

若い層では、あまりみられない。(九)

鹿児島・(薩) ダツレ

事実の並行を表わす。東京語の「がてら」に当たる。例、買物ダツレ 行キンシタ。(日記)

〔が〕

長崎・トノ

「が」の意、イキマストノ用事ヤアルマッセンカ(参ります)が——、今イウタトノモウ忘レタカ(今言ったが——)、ダメッテ考エトッタトノ泣出シタ(——考えていたが——)

「疑意」ガタンテイウタトノイテミロ(ガタント言ったが——)

↓

「動作」通ルオットノ見ユル(通ってるのが見える)(長方)

鹿児島・奄美大島

共存・時間的推移・既定の逆説条件等を表わす、つなぎの「ガ」に当る。ドゲエヤシランガ、イキッロ。(動きはしないが、生きてるだろう)

「が」の前が右のように、否定の「ン」でなく、肯定形である場合はすべて、「ガ」は「ツカ」にかわる。イキイヤスツカ、キャシカヤー(行きはするが、どうだろうか)

〔けれども〕

九州総括・薩隅地方に「ドン」類、肥筑地方に「バツテン」類、豊日地方に「ケンド」類が分布する。

「ドン」は、「ドンカラ」「ドンカイ」など、助詞「カラ」類と複合してもおこなわれる。女性に用いられやすいと言う。なお、「ドン」は、肥前西辺へと分布する。

「バツテン」類は、薩隅南部地方(甌・種子・屋久島を含む)にもみいだされる。「バツテ」「バツチ」「バツ」「バツカイ」などと、形態のうえに諸相が認められる。先述の「ドン」類との併用地域もある。

豊日地方の「ケンド」類は、山陽側とのつながりが自然である。山陽側との交渉の最先端に立つ、同地方の、新化の事実を物語っている。(九)

九州総括・逆接「けれども」〔少〕

パッテン系が肥筑、ケンド系が豊日、ドン系が薩隅に分布する。ドン系は肥前西へとたどられる。

薩隅南端にはパッテン系の「パツ」がみられる。甌・種子・屋久の諸島にも、パッテン系が分布していて注目される。(九)

九州総括・接続「けれども」(元来形容詞已然形語尾)は西日本式「ケンド」が支配的に両豊・日向に流布して九州語を三分する最良助詞なる事は周知であるが、下に鼻音の添付した「ケンドン(ガ)」も相当にあり、「ケツドン(ガ)」「ケツドム」「ケド(ン)」も少し存在する。これに対して同様鼎立して筑紫言葉の目安ともなる「パッテン」は『物類称呼』や十九作品には現れず、大田南畝蜀山人『金曾木』文化六(一八〇九)年長崎立山詠歌が走りとなるらしく肥筑地方から彦岐に亘っており、対馬もわずか入っているが、両豊部では存せぬ(豊後日田市郡で若年刑に聞かれるぐらい)。ちなみに東北地方にも呼応して存するが、これは代名詞に続く時「ソレゲパッテ」の如く「ゲ」を介入する点異なる。筑紫のは「パッテ(ー)」「パ

ッテンカ(ラ)」「パッテンガ(ー)」「パッテモ」等訛形さまざままで、また「パッチ(カ)」「パットン」「パチ」などが両肥に点在する。語源は「抜天」ならぬ不合理な *Etymon* 説に取って替るべき「ばとても」が一般常識となって来たようだ。「パッテン」系が大観して存しない筈の南九州に僅か飛地無きにしてもあらずと同様な意味において、「ども」の訛形「ドン」系が肥前所々に拾われ(島原半島の已然形に接続して「書ケヂョン」式、彦岐にも「トンカラ」がある。(九三))

福岡・反意接続「とも」パッテン。

長崎「パッテン」で著名な「パッテン」は「ばとても」熟合したものとする説明が最も妥当な解釈とみられるが、この「パッテン」は西から筑後に入り、筑前に及ぶと、多くは「パッテン」と「ン」を落とした形が用いられてくる。軽い反意接続で頻度数の高い助詞である。(フチ)

福岡・既定の条件に対する反意接続の「ども」ケンド。

「けれど」から由来するものとみられているが、四国から豊前・豊後に入り込み、九州東北方言を特色づけ、南九州から出た「ドン」とその複合形と共に、九州に於ける反意接続の上に鼎立して居り、東京弁の「ケドレ」とよき対称を示している。(フチ)

福岡・バッテンカラ(久)(浮)(井)(瀧、バッテン(久)
(山)(福)(朝)(池)、バッテング(筑)(糟)(糸)(糸)(嘉)
(浮)(八)、バッテガ(早)、バッテ(福)(糸)(早)(筑)
(糟)、ケンド(京)
ケンドはケレドモの転語にしてその他は皆ベクアリテモガの
転訛なるべしという。

バッテンから久留米市民全般に最も多く使用するものなるを
以て他県人住々久留米地方の方言の重なるものを摘みて、イッ
チョ、ケンデ、バッテンカラ、ゴウホニ、ダッデン、ワカラシ、
バイといて嘲けることありという。(福岡)

佐賀・逆接「けれども」に相当するのはバッテンで、これも
全県下にある。島栖地区はバッテをよく使う。佐賀西部地区で
はバッテンよりもイドンを使うことが多い。例、あつたけれど
も√アッタイドン。「ても」に相当するところはテン・タツチ
ヤーとなる。例、とめても√トメテン・トメタツチャー。「の
に」に相当するトケー・トコレも広く行なわれる。例、したの
に√シタトコレ・シタトケー。(九)

佐賀(北)・ニバッテン・バッテ

ハジメ カッタバッテン ニカイメワ マケタ。(始めは勝
つたけれど二回目は負けた)「バッテン」は、逆接の既定条件

を表わす。これは、「バッテ」ともなる。このような形の縮約
化の他面には、また、オドーマー ツカワンバッテング オト
ナン ヒトノ ツカワス。(ほく「たち」は使わなければお
となの人が使われる)のように、「バッテング」のおこなわれ
ることも少なくない。(九)

佐賀・長崎・バッテン・バッテ

接続助詞の「バッテン、バッテ」が両県下ほとんど全域に用
いられる。対馬も厳原地方にはこれがある。但し、長崎県大村
地区や島原北部地区ではバッテンの代りにジョンを用いる。イ
カンヤッタジョン(行かなかつたけれども)。なお、佐賀西部
地区ではバッテンよりもドンを用いることが多い。イカンジャ
ッタドン(行かなかつたけれども)。(コ)

長崎・逆接の「けれども」にあたる言い方は一般にはバッテ
ン・バッテ・バッチーなどばってん系が多いが、中に大村・多
良見のジョン・波佐見・亀岳・諫早のドンなどの言い方がみら
れる。(九)

長崎・バッテン

「が・けれども」の意。走ッタバッテンオツツカンジャッタ
(走ったが——)見たバッテンワカラシ(見たけれどもわから
ない)

「比較・否定・反対」ヨカバツテン、タツカ（好いけれども高い）。イタバツテン、ナカウツ（行ったがなかった）

「それだけでも」の意。ソラソノジャロバツテン……（それはそうだけれども……）（長方）

長崎・（対馬）

バツテユ（けれども）田舎のみに使う（ツ）

大分・ 逆接の「けれども」にあたるものには、ケンド、ケンドン、ケドガ、ケンドカ等がある。日用には、西九州ふうのバツチェンも行なわれる。いずれも終止形に。

打消しの中止、たとえば「行かないで」の「いなくて」にあたる言いかたは、一般に、イカンデ、イカンジのように、ンデを動詞未然形に接尾する。変わったのに、日田の行カナナのイナナがある。（九）

大分・（長）ミケンド（ケン）

シエウシカローケンド カツシエチヨクレ（忙しいだろうけれど手伝って下さい）。オルケンド ハナシチャル（馬は）いるけれど放牧してある）。

逆接の修飾部である。この「ケンド」は、ゴツツオーダスケン ヒトツモ クワン（御馳走を出すけれども少しも食べない）。デル トコモアルケン デラン トコモ アル。（出る

ところもあるけれども出ないところもある）。のように、まれに、「ケンド」の「ド」の脱落した「ケン」という形をとって実現することがある。順接の「ケン」と区別されることは言うまでもない。（九）

大分・バツテン・ケンド

バツテン（バツチェン）「けれども」の意。（日）〔肥・筑地方。ケンド「けれども」の意。（全）〔高知・愛媛・香川・広島〕（大方）

宮崎・

逆接「けれども」にあたるものとして、日向ではケンドン（或はケンド・ケン・ケットン・ケッド）、諸県ではドンを使用。しかし日向内でもドモ・ドンを使う所が少しある。また、バツテン・バチが、日向の南部（福島・本城・市木・都井など）で使われているが、漁業関係で海を通じて入ってきたものと思われる。（九）

熊本・（深）バツテ

接続助詞バツテは前件と後件を逆接的につなぐはたらきをもつて用いられる。 ヤマワ ヤマバツテ ヒクカヤマタン。

（山は山だが低い山です。）

アンマリ オイシカモンジャ ナカバツテナー。（あまり

おいしいものではありませんけれど。」

アルガ ジェンバダスドバー オルガ ジャートコー。

（あいつがカネを出すだらうけど、おれが出しておこう。）

ムズカシカホンジャルバツテンカ カナツキナロバ ヨ
メヤス。（むずかしい本だけれど仮名つきならば読めませう。）

接続助詞 バツテ は逆接助詞として、前件・後件を逆接的につなぐが、用言だけでなく、体言にも付属する点が目ざされる。音声変容としてのバーや、係助詞モと結んだ形バツテモ・バツテン、接続助詞ガと結んだ形バツテガや、それらをさらに重合させたバツテング・バツテンカなどの諸形であられることもある。これらのうち、少年層ではバツテン・バツテングの形が多く用いられている。（九）

熊本・

逆接は老少ともにバツテンが全体的に基本であるが、球磨・芦北の老年層にはドングがあり、本来はこの方が盛んであったらしいが、現在は老年層でも急速に衰えて、バツテン専用に近い状況を呈するに到った。

なお打消接続の形としては、行カデナ、行カジ、行カンナ

（行カンニヤ）の形がある。（九）

熊本・バツテン・トシヤガ・ケン・セン・デ。

長崎はってんとい、肥後また「ばってん」「くさい」を方言の代表的特徴形として呼んでいる。「ばってん」は肥筑方言の特徴形であるが、野村伝四氏の大隅肝属郡方言集にも「バツチェン」、「バチ」を採録している。（薩隅方言の代表形は「ドンカラ」、「ドン」である）熊本県でも東部の阿蘇郡方言では「ドン」が相当強く分布している、また球磨郡には「ナイドン」「ジャイドン」がある。これがむしろそれらの地方の本原的な方言形で、「バツテン」が熊本方言代表形として次第に浸透しつつあるのが実態である。「バツテン」は東京語の「けれども」と対応する形で、俚謡にある「嫁入りすこたしたばってん」が典型的な用例を示している。

「バツテン」の語原について英語の *but and* だとか何とかいうのが一時は流布されたものだったが、助詞に外来語を用いた例もなく、それは一場の茶話である。この「バツテン」系が東北方言にも現われていることは注意されなければならない。小林好日博士の東北方言に、この反対の結果を伴う既定条件を表わす助詞として、「ゲントモ」「ドモ」「バテ」「タテ」の四つの形をあげ、それが地理的に分布対応している事を示された。そ

の中「バテ」は、青森県の津軽地方と秋田県の北秋田郡であるという。「ドモ」も「ゲントモ」もあることは、九州方言が、「ケッドン」(ケントド)「ドン」「バッテン」と三つの系統になつて分布対応しているのと趣を同じうする。

このような場合、その語法的な型は三者皆同じだから、容易に交替し得るものであるから、たとえば熊本県の場合、熊本市を中心とした「バッテン」は阿蘇郡、球磨郡の「ドン」を駆逐しつつあり、一方東京語の「けれども」が「バッテン」にとつて替る形勢も見られる。方言語彙は除々として動きつつあることは明らかである。さてこの三つの形の新古は一概に言えず、その地域でどの形が先に定着していたかしか問題にならぬ。阿蘇郡や球磨郡では「ドン」系が古いことは推断できる。これから推して、熊本県だけで言えば、「ドン」系の地盤の上に「バッテン」が根を張って行ったものかと思う。

「けれども」系の語原は、助動詞「けれ」と助詞「ども」の接続したものと、形容詞已然形語尾の「けれ」に「ども」の接続したものが合流したのである。

熊本方言の「ドン」は問題もなく接続助詞「ども」の系列であつて、「けれども」も合せて「ども系」とすることができ、これに対して、「バッテン」系の語は、接続助詞「ば」と「と

ても」の結合したものが、順接と逆接と意味がずれたものであろう。東北方言の「バテ」の場合「も」の膠着は第二次的で、「ばとて」であるが、この「と」についても「たけれど」の意にずれたことは問題であるが、ありえないことはない。「バッテン」「バッチ」の成立の経路を再構してみれば次の如くであらう。

言うたればとてユウタバトテユウタバツテそしてここで成立した「バッチ」が他のいろいろの語形に接続して語法を平均したものであらう。

ソレデヨカロ・バッチン(それで好かろうが)

ユクコタユク・バッチン(行く事は行くけれども)

この語原の意味と現在の意味のずれを考え、更にこの語形が日本の南と北と、周辺にのみ分布していることから、古いといふことは一応言える。しかしどのくらい古いかはわからない。九州や東北で単独に発生した形とは考えられないが、必ずしも全国この形が平均したことがあると考える必要はない。「ばとて」「けれども」のどちらもかなり意味用法のずれがあるが、むしろ全国を平均したに近いものがあれば「ども」系であらう。「けれども」や「ばってん」はいずれも近畿か関東で発生した多少方言的な形が、伝播して、不完全に「ども」系を浸蝕した

ものではあるまいか。九州における發源地は長崎あたりであったかも知れない。もしそうだとすれば必ずしも方言周圍論の例証にならないことになる。(ク)

熊本・バツテン

「バツテン。」代表的には既定の逆接条件を。

1、嫁入することしたばってん……(俚語)

これが、下の句を省略すると、一種の終助詞的機能になつて、

2、ワタシナラ、ソースルバツテン

3、ソッデンヨカバツテン。(それでもよいけど)

と、多少何か残した、割切つてしまわない表現となる。これは、東京語の「けれども」「けど」にも随分ある表現である。これ

は、東洋語の「けれども」

「バツテン」の語源が「ばとでも」であることはもう疑のないこととすれば、本来は既定の逆接条件になるはずであるがその例も稀にはあるので、

4、ソギヤンイラン心配センバテンヨサソナモンタイ。

と、打消をうけて仮定条件になることがある。これが語原に近い用法である。この仮定が補充されて既定条件をも示すことになつた所に肥筑方言のバツテン語法の成立があつたのである。

附屬語的用法から自立語用法に轉換すると

5、バツテン、ソーモイカンモネ。(そうも行かないものを)

と、接続詞になる。「バツテン」の下に「ガ」が附いても、意味は増加しない。同意の語の重なりになるからである。一層割

切らないためらいを残した表現になることが自然である。

6、ソリヤソーバツテンガ、コマルタイ

次に「バツテン」に類した「ガ」について。これは接続の機

能が退いて、詠歎になつてゐる。

「バツテン」にゆづつたのである。

1、ソレデエーガ。ヨカガヨカガ。2、ソリナラアタシガ知

ツトルガ。

次に熊本県としては周辺の方言、「バツテン」に対応する

「ドン」。阿蘇郡は「バツテン」と「ドン」との重なつた地域

で、筆者の郷里でも、

1、雨ニナラニャエードン。

2、行クコトワ行タドンツマラジャッタ。

のように言うことが稀ではなく、更に山東部に行くと「ド

ン」形式が代表的になる。やがては熊本の「バツテン」に移行

する運命にあるだろうが。

球磨郡では「ナイドン」「ジャイドン」が用いられる。

3、イタイドン(行たれども)

4、シタナイドン(したなれども)

5、シタツジヤイデ(したとなれども)

この「ドモ」系は、方言区画から論ずれば、肥筑方言の圏外に出るもので、それぞれ豊日方言、薩隅方言の特徴形になるものである。(ク)

鹿児島・

逆接「けれども」。ドンが一般的。ドンカラ、ドンカー、ドンカイ、ドンカランなど両半島南部を除き勢力がある。総じてドンは活用語の終止形につくが、薩摩北部では、形容詞や過去形につく時はイイドン(良カイドン・シタイドン)となる。ドンの外、バッテン・バッチェン・パッテ・パッチ・パツなどの何れかが掛宿郡・枕崎方面・大隅の肝属郡に分布し、離島では甌・種子・屋久に分布する。今回の調査では屋久島のパツカイは珍しい形だが、これはパッチカラの複合形だと上村は見る。

(九)

鹿児島・(岡)

バッテン類とドン類とでは、前者が一層盛んである。テーとトとは、トニ(のに)から出て、テーの方が一般形。「ことに」「ものを」からのコーデ・モンニュも「のに」の意味で多用さ

れる。(九)

鹿児島・(薩) ドン

確定条件を逆想的に表わす。例、日和良カイドン風が強カ。(日記)

副助詞

九州総合

分量の「ほど」はこのままの形が圧倒的で「ホツ」がこれに次ぎ、異系の「シコ」も盛んであって、「ガタ」「ガツ」「ガト」も多い。

「しか」は標準語ならぬ方言訛りでは「ハカ」が多いが、もっとも勢力のあるのは「ハッチャ」

「ばかり」は「雨ンジョー」式が普通。(九コ)

福岡・(総合)

副	比較		
最高限	より	よりカ	
だけ	よりも		
シコ・シコラ			
			「モ」よりも「カ」と用いることが多い。
			「持てるシコ持って来い・あるシコラ取ってしまえ」の様に、動詞の連体形に付く。ただし、「お前にダケ(制限)言おう。合格は十人ダケ(分限)」には、ダケを用いる。

並列助詞	助詞係		助詞		
	強意	指示	添加	限定	換値
並列	こ	こ	さ	の	は
やら	そ	そ	え	ばかり	くらい
やら	こそ	クサ・クサイ クサン	サイカ・シヤ カ・セキ・セカ	バックシ	ガト・ガタ
「なんやらかんやら・どうチャラかつチャラ・ど筑後では並べて強調する傾向が極めて強い。」	「施コン済まんやネ」は、係り結びの関係を保っている。	「あのクサ、俺がクサに用いられる。博多の代表方言とされている。」	「飯サイカ食えん」の様に既存の事火の上に更に添加を意味する。	「昔話バックシしとる」の様に限定に用いる。「バック」にもなる。	「百円ガト下さい。五合ガタある」の様に、換値評価に使う。

(九)

鹿兒島・(岡)
各「係」に立つ修飾部の、ものと形は、以下のように整理できる。

(は) ーワ・ーア・ーナ△例 カンナ(紙)
は(▽)、ー(ワ)△例 メサ(飯は)、

(も)

ウヤ(瓜は)▽
ーモ、ーヂヤ△例 チャヂヤ ノマン。

(でも)

(茶も飲まない。)▽
ーデン、ードン、ーバシ△例 ユメバシ

(さえ)

シ ミゲ ガ。(夢でも見たのかい。)▽
ーセガ△例 ホネセガ クテ。(骨さえ食うのに。)▽

(しか)

ーシカ、ーガハガ・ーガハガ△例 ジュ
ーエンガハガ モダン。(十円しか持た

(こそ)

ない。)▽、ーハガヤチャ
ークサ・ーッサ、ークセガ△例 ソイク
セガ ミムツモ セン。(それこそ、見

(まで)

向きもしない。)▽
ーツイ(老)・ーヂユイ(全)△例 体言につく▽
ーマツ△例 オソマツ(遅くまで)、オ
トツマツ(会う時まで)▽
ーマツヅイ(老)・ーマツヂユイ(全)

(助詞につく)

△例 ネダギー アスパン。(泣

いたが最後、遊んでやらないぞ。▽

(ばかり)

↑バツカイ

(ほど・だけ)

↑コ・↑ヒコ、ガヒコ△例 コガヒコ

↑クイヤイ。(これだけ下さい。)▽、↑

ガツ△例 ヒヤクエンガツ (百円は

ど)▽

(ほど・ぐらい)

↑ヒコバツカイ、↑ガヒコ△例 コピン

ガヒコ ヒツチョレバニー。(子供ぐら

い知っていたらねえ。)▽↑シンヒコ△例

オヤンヒコ クローオ スイ モンナ

ナガ。(親ほど苦労するものはな

い。)▽

(ほどに)

↑ホドン△例 アホドン アグツチェ

オ。(あれほどに大口開けて。)▽

(など・ぐらい)

↑ドソ

(か)

↑ガ・↑カ

(ついでに)

↑ダヂュラ・↑ガテラ△例 モノメイガ

テラ△例。(参拜かたがた来い。)▽

(しなに)

↑ヤシ、↑ガゲ、↑シネ

(ごと)

↑トメ△例 カワトメ ペー。(皮ごと

食べ。)▽

(だてらに)

↑ダテラ、↑ダテラン

(のままに)

↑ンママ・↑ンマンマ

(まさに)

↑ママ・↑マンマ、↑ナイ△例 ユダナ

イ(言ったままで)▽

(ずつ)

↑ヂュツ(全)・↑ツツ(老)、↑アデ、

↑アデヂュツ

(のくせに)

↑ンヨツゼ、↑ンクツセ

(や)

↑ヤ

(やら)

↑ヂヤ、↑ヂヤツチユ、↑テロ

(だの)

↑ダノ・↑タノ

(どころか)

↑コヂャツセ△例 ムットガロコヂャ

ツセ ミーモ ナラン。(おもしろいど

ころか見ることもできない。)▽

鹿児島・(西)

wa △は▽、no △も▽、koso △こそ▽、sai △さえ▽、sika

△しか▽、haga Oca △しか▽、など。(日記)

鹿児島・(西)

giri △ぢり▽、bakari △ばかり▽、nando △など・なぜ▽、

basi <でせ>、ほかに、to <の>、siko <たけ (の量)>
 golo <よう>など。(日記)

鹿兒島・(西)

wa, o, oba, ni は前に来る語の末尾の部分と融合して、次の

ように規則的に變化する。(oba は o に準ずる)

語形	意味	wa	o	ni
(1) isi	<石>	isja	isjoo	isii
umi	<海>	umja	umjoo	umii
(2) oze	<あなた>	ozja	ozjoo	ozee
hune	<舟>	hunja	hunjoo	hunee
tate	<縫>	tacja	tacjoo	tatee
sode	<袖>	soz aa	sozjoo	sodee
(3) hana	<花>	hanoo	hanoo	hanaa
waga	<お前>	wagoo	wagoo	wagaa
(4) moko	<婿>	mokaa	mokoo	mokee
siwo	<世>	siwaa	siwoo	siwee
(5) haru	<春>	haraa	haroo	harii
hucu	<よ+の>	hucaa	hucoo	hucii
(6) niku	<肉>	nikwaa	nikwoo	nikwii
toohu	<豆腐>	toohwaa	toohwoo	toohwii
(7) doogu	<道具>	doogaww	doogwoo	doogwii

(8) kin	<絹・金>	kinaa	kinoo	kinii
(9) zen	<銭>	zenja	zenjoo	zenii
(10) haa	<灰>	haawa	haa(w)o	haani
(11) senkoo	<線香>	senkoowa	senkoo	senkooni

ただし、一モーラ語の場合には、(8)式に變化することもある。
 too ~ tawa <田は>、too ~ ta(w)o <田を>など。また <先生> (sensi, sensee) は (11)、(10) の兩様の變化をする。(九)

[北]

九州総合

主格の「は」は撥音「ん」に続くと「雲仙ナ」のように音使をとるが九州式としては(古代日本語に多い)「ノ」(更に「ン」となる)を用いて、「雨ノ降リヨル」などとするのが普通。(九)

佐賀・(北) フ

「フ」は普通、前行語の末尾音と融合しておこなわれる。
 |イマーソヤン|コターナ|カ|バッテン、(今はそんなことはないけれど)。なお、前行語の末尾音が撥音である場合は、「ホンナ」(本は)、「シンブンナ」(新聞は)などのように、連声の現象による、「ナ」がおこなわれる。(九)

佐賀・長崎・係助詞の「は」は、先行語尾Nの場合は「ナ」となり、その他の場合も次のように変化する。水は〔mizu〕、川は〔kawa〕、紐は〔guba〕（a・o・uの語尾の場合）、葉は〔kusurja〕、竹は〔takeja〕（i・e語尾の場合）、新聞は〔sinbunja〕（N語尾の場合）（コ）

長崎・

トハ } コッチント、ハキレカ（こっちは綺麗だ）
 カトハ } フトカト、ハオムタカ（太いのは重い）
 ノハ } コマンカ、タツレテイカン
 カタ } （小さいのは併れて行かぬ）

（長方）

長崎・ラーワの訛
 コルバツカカラ、ムツカシカ（こればかりは）（長方）

〔も〕

鹿兒島・宮崎南部・ジャイ、否定的表現の中で強めに働く。
 例、ダイジャイ、コンジャッタ（誰も来なかった）。（コ）

〔こそ〕

九州総合 係り結びの「こそ」も今や九州でもほとんど消滅

したとは言い難いと思う。もちろん文語意識が基盤背景になっているらしいが「酒コソ飲メ煙草ワノマン」（佐賀県杵島郡南有明村）、「風コソ吹ケ雨ヤ降ラン」（大分県東国東郡武蔵町）のような実例報告は少ないけれど決して絶無とはいえない。

ところで、この助詞が享保三年『西園曲』巻之四の筑前園曲に見える「さればくさ嫩はなの華咲く博多練黒崎」のように（已然形の結びを必要とせず）「今日クサ」「有ルクサ」の如く減勢頻用されている現在実態を無視できない。「クサ」「クサイ」「クサン」が多く「コス」「コサ」「クソ」「クセ」も土地によってさまざま。（九二）

福岡 「こそあれ」を出自とするクサイ・クサは強調の文末詞・間投詞として筑前筑後に盛んである。一方、豊前には、行クコトガイッテクセ、（行く必要があるものか）のように反語表現の文末詞としてクセがあり、強調逆接表現文における係助詞コソも聞かれた。（九）

福岡 強勢助詞の「こそ」——「クサ」

平安朝文芸に極めて多く用いられている「こそ」は、強意の助詞として「ぞ」よりも一層強く係り、特に事物のある一つを取り立ていうために、しばしばその裏に反意を含んでいることが多い。そして、その文末を已然形で止める係を生じている

が、これとは別に平安朝でも「人まにより来て『わが君こそ、まず物きこえむ』(枕草子)」「右近の君こそ、まず物見たまへ(源氏)」の如く、呼びかけに用いていることがある。こうなれば係助詞ではなくって詠嘆助詞のようになっていっているわけであるが、九州に行われる「コサ・コス・クサ・クサイ・クサン・クソー」などは即ちこれである。「あのークサ、俺がクサイ、明日クサ」と言った会話は何れもこれである。己然止めを失って来ている。係助詞としての「こそ」は「俺コソ済まんやね」の如くやはり原形のまま「こそ」が用いられていることを見るのである。(フチ)

福岡 クサ(福)(筑)(久)、クサはコソの転訛なるべし久留米地方にて是は巳の所有物なりという意を他に對して特別に制限していうときにコリヤーオドンガツデクサアレという之は「是は巳の物にこそあれ」ということなり。(福岡)

長崎・クソ……コソの意。コンダクソ、ヒドカメニアワスル(こんどこそ、ひどいめに——)。コンダクソ、カツソ(こんどこそ勝つよ)。(長方)

大分・(長)ーコサレ・コソ(コス)

「コソ」に関する、いわゆる係結の現象が、「コサレ」という特定の形に限って観察される。

ヨナガジャコサレ ソゲー シエカンジエン イージャ
ネー カノ。 夜長だものそんなに急がなくてもいいではないかね。

オマエガ ワリンジコサレ ハロー タツル ナ。 お
まえが全く悪いんだもの、腹を立てるな。

「コサレ」は、「こそあれ」に由来する。この「コサレ」は、一体の機能者として、上接部をしめくり、述部の修飾・限定にあずかる。

上のように特定の結びを呼ばない「コソ(ス)」は、「コサレ」以上に頻用されている。

ヘーザラトコソ(ス) ユー。 灰皿と言ふのさ。

シエツカク ソノ タメニコソ キチョル ニー。

せっかくその為にこそ来ているのに。

この用法は、少年層などでは、みられない。(九)

宮崎・「こそ」の koso (an hio koso あの人こそ) (日記)

鹿児島・種子島にはコソの係結びが行われている。ワガジャカラコソ、ゼニョーカータモンナレ。(君だからこそ銭を貸したのだよ)、雨コサーフラネ風ハ吹イテモ仕事ハデクル(コサーはコソハの短縮形。雨が降らないから風は吹いても——)。何かの拍子に出てくる語法。だが中年層でも使う。(九)

鹿兒島・奄美大島・「クサ」共通語の「こそ」に当る。例えば、ウリイクサ ウトゥルサヌ(それこそ、恐ろしくて)。「こそは」に相当する「クサヤ」は方言では用いられない。

強意のための「こそ」に対して、最近は前記「クサ」を用い
ないで「ドゥ」[dɯ]を用いる。イヤドゥワルサル(お前が悪い) イヤクサワルサ(お前こそわるい)。

右のように、両者はもともと、大部趣きを異にするものではあるけれども、最近「クサ」は、余り用いられなくなりつつある。

「ドゥ」は、児童・生徒の「共通語」にも取り入れられて、次のようになる。ボクドゥアツタが(僕だったよ)。ドウスルンドゥアツタル(どうするだったか)。(三)

〔さえ〕

福岡・添加の「さえ」——サイカ、「その上……までも……」までが「などの意にあたるが、この「さえ」(添え)又は「然るうえ」かといわれる)の訛形に九州では「シャカ・サイカ・セキ・セカ」などが各地にいわれる。(フチ)

佐賀・(北) シャー・シャガ

クルマシャー モットツギー ドコサンデン イカルツ

(車さえ持っていればどこにでも行ける)。 ジェンシャガ

モットツギニャー ナンデン カワルツ (お金さえ持っていれば何でも買える)。「シャー」「シャガ」は、例文のように、

「ニシャー(シャガ)ーギー(ギニャー)」のように慣用されて、仮定条件表現の、特定の提題にあずかる。(九)

長崎・サイ……サエの訛。コルサイアレバシメタモン(これさえあれば——)(長方)

大分・セーカ、「さえも」(野)(分)(市)(速)(直)(巻岐)

例、あの人でセーカ出来ん事ぢや。(大方)

熊本・(深) シャーカ・ナット

カサキヤ スクナカレバ、ダクー。(蚊さえ少なければ

夏は楽だ。)

イキサカスレバ スムトジャバッテ。(行きさえすれば

済むのだけだ。)

クウシナット クワスルター。(菓子なりと食わせる

よ!)

ヌクーナット アレバ ヨカテー。(あたたかくなりとも

あればいいのに。)

ケンサノ コラルツマデ シノベテシャーカ オレバ ヨ

カ。(検査に来るまでに大掃除してさえおればいい。)

ペンキョー シテナット クレロバ。 (勉強してなりと
くれれば。)

副助詞シャーカ・ナット に共通な特徴は、かならず、接続
助詞バ・バッテ などが作る条件文を後統することである。体
言・用言に付属する。シャーカは サカ・シャーキャ の形を
とることもあり、少年層では、シャーキャを多用する。

鹿児島・宮崎南部・セカ 共通語の「さえ」にあたる。限定
をあらわす。例、コイセカスマレバヨカ (これさえすまされば
良い)。(コ)

鹿児島・(薩) ジャイ 体言について後に打消の語を伴い、
東京語の「さえ……ない」の意味を表わす。煙草ジャイ飲ンガ
ナラン。(日記)

鹿児島・奄美大島 「サエ」共通語の係助詞「さえ」と同様
に用いる。(コ)

「すら」

鹿児島・奄美大島、「スマ」共通語の「すら」「でさえ」「さ
えも」に当る係助詞。ヤンスمامチトクミイキラン (家でさえ
も持ちとめ得ない)。(コ)

「ばかり」

長崎・バツカリ (許り) コガシコバツカリ何ナルモンナ (こ
れ丈ばかり何になるものか)、スラゴトバツカリイウ (嘘ばか
りいウ) (長方)

大分・ジョー 「ばかり」「のみ」(全)「阿蘇」例、あの人
は嘘ンジョー言う人じゃ。筑紫方言「あれがンジョー」(大方)
大分・(長) ンジョー。ウソンジョー イヨラ (うそば
かり言ってるよ)。アブランジョーワ メーニチ クエル モ
ンカ (油ばかりは毎日食べられるものか)。(九)

宮崎・「ばかり」の zoo (owii mon wa toimo ni zoo 多いの
はさつまいもばかり) (日記)

「だけ」

福岡・程度まひは限度の「だけ」——シコラ。「シコラ」と
もいう。「ぐらい、ほど」などと共に形式名詞とみてもよいの
である。ほかに「百円ガト 下サイ」「それバツカシャー」な
ど類例は多い。(フチ)

佐賀・(北) シコ。コガシコ シトケ (これだけしてお
け)。ナルータシコ オベートツ カ (習っただけ覚えてい

るか)。一定の範圍、または限定を表わす。(九)

長崎・カギリ「までに、きり、ぎり、だけ」コンダカギリデ
オシマイ(今度きりで)。アシタカギリカヤス(明日まで
に返す)。モイッペンカギリユルス(もう一度だけ許す)。(長
方)

大分・(長)ゝギリ。ヤスミン ナツタギリ イツチヨル
ニー(休みになってすぐ行つてるよ)。モー コレギリ
イリマシエン(もうこれだけでいりません)。

ゝガナ。ジューエンガナ オクレ(十円だけ下さい)。ナ
ロータガナ フクシュースル(習つただけ復習する)。(九)

大分・(長)ゝハツチャー。コレダケハツチャー ネード
ー(これだけしかないぞ)。(九)

熊本・(深)シコ バツカリ・グニャー。クウシコ クッ
トケ(食うだけ食つておけ!)。コガシコ ヨカト(これだけ
でいいの?)。オカゲデ タツシヤカバツカリデゴザス(おか
げで、病氣一つせずにいます)。サブカグリャー ナンキヤ
(寒いぐらいが何か)。副助詞シコ、バツカリ、グリャーは用
言だけでなく、体言にも付属するが、シコは連体格助詞ノ、ガ
を介して続く。(九)

鹿児島・(西)gri sosikogirika (それっきりか)。(Kotoo

changri: kikan 声を出したら承知しない)のような使い方もあ
る。(日記)

鹿児島・奄美大島「サー」共通語の「ほど」「だけ」に相当する
副助詞。イユンサーヌクウトウヤアリ(言うだけのことはある)
。マヤンサーヌタマシ(猫の程のりこうさ)。「サー」は右のよ
うに、動詞・助動詞連体形及び名詞には「ン」を介してつく。

(二)

〔なりと〕

福岡・チ(久)(井)「何々なりと」例えば、知ランチイウタ。
持ツトルチイウタなどの如しとの通音転なり。(福方)

福岡・ナットン(久)(八)「なりとも」「なりとも」の転語なり。
魚なりとも釣り来らんを、魚ナットン釣ツテクウというが如し。

(福方)

〔しか〕

佐賀・北ゝホケ。カシトホケイワンジャッタ(菓子としか
言わなかった)。(九)

佐賀・北ゝギー。イツチヨズツギーナカバツテンヤロー

デ(一つずつしかないけれどやろうよ)。「否定の叙述と呼応して存立する。特定の限定を表わす。(九)

長崎・ホーケニャ「しか・程しか・ほか・外には・だけしきや、ばかりしか」分量—コッダケホーケニャナカ(これ丈しかない)。外には—ダマツテ見トルホーケニャシヨシナカ(黙って見るより外には仕方がない)。外—オナゴホーケニャイカレント(女しか行けない)。(長方)

長崎・対馬、ハカ「……しか」コレシコハカ無イ。一ツハカ無イ。(ツ)

鹿児島・(西) *hagaŋcja gongohagaŋcja naka* (五合しかない) (日記)

南九州・ハナシ「ほか……ない」肥後の方言。一人ハナシ居ラン(一人しかない)

ハナツチャ・ハガツチャ 薩隅地方。

平安時代の末期から鎌倉時代にかけて行われた「放ちては」を短縮した形で、用例を挙げれば、宇治拾遺物語の「小野篁広才の事」の版に「おのれ放ちては誰か書かん」とあるのがそれで、今日ではそれが助詞化して南九州に残存しているのである。

(一)

[でも]

佐賀・(北) イバシ。アノ シトデバシ ナシーニャー

ヤクインモ ツトマンミャー(あの人でもないと、役員も動まるまい) 提示の機能を見せている。ペンキョーバシ スツゴト(勉強もできないくせに)。この例文に見られる「イバシ・ゴト」は、一文中に慣用されて、一種の反語表現を生んでいる。全階層におこなわれる。(九)

佐賀・(北) 限定表現にかかわる助詞は、次のようなものがある。デン(でも)・ドン(ども)・ナト(なりと)・マデ(まで)・バツカイ(ばかり)・タギ(だけ)・ズツ(ずつ)・ナガラ(ながら)・カタジ(ながら) 以上、北山方言の文表現の一斑を記述した。(九)

熊本・「バシ」の反撥力

中世から近世にかけての文献に見える語だが、それが、方言の中で、どの程度伝統を伝え、またどの程度発展させているかを問題にしたい。言語研究の興味は、言語がどのような理法で動くかにある。室町期の用法は

(a) 孝行者デバシアルガ(蒙求抄卷二)

(b) 二心バシ持ツナ(々卷四)

この二つの形式に帰しそうである。(a)の意味は、現在の熊本方言の意味とは違って、「孝行者でもあるのか」で、判断に推量的な意味が加えられている。明瞭な判断ではない、「でもあろうか」である。(b)の文形式は熊本方言には存在せぬ、これも「二心でも」であって、この期の「ばし」は「でも」と等価であることがわかる、(a)は疑問的判断の表現、(b)は仮設的禁止表現と名をつけてもよい。

熊本方言では、

1、知ツテバシオルゴツ

は、疑問表現から反語になっている。「知つても居るかの如く」と直訳すべく、表現された真意は「知つても居なくせに」の否定になる。

2、なんかザトウのくせに、言うたつちやわかりばしするか

(荒木精之・肥後民話集)

これは、疑問文形式をとって反語になっている。「わからなくせに」が真意である。

(3) 活動写真バシミテキタツカ

これは反語にならずに、正真の疑問表現。

(4) 映画バシ見トルトゲロタイ

これは疑問表現ではなくて、仮語的な推定の表現で、「映画

でも見ているのたろう」の意。

以上が熊本方言の「バシ」表現の領域である。(ク)

熊本・バシ

I キューヨーバシ アットキヤー。(急用でもあるのか?)

II サケデ エクリヤーバシ スルゴツ。(酒で酔いでもするように。)

III ネダンノ タコーバシ アルゴト。(値段が高くでもするように。)

IV ヨカオナゴジャリバシ スリゴツ。(美人でもあるように。)

V キューヨーデバエ アルゴツ。(急用でもあるように。)

VI キンタバシジャカランバ。(あなたでもなければ。)

VII パカジャルバシンゴテ。(馬鹿でもあるように。)

副助詞バシは文例一・三のように体言に付属することもある。用言に付属する時はいわゆる連用形に付属すれば、スルゴトに続き、いわゆる終止・連体形に付属すれば、ノゴトに続く。

コピュラ句に付属する時はジャリバシスルゴトの形をとるか、

ジャルバシノゴトの形をとるか、デバシアルゴトの形をとる。

バシはバエとして用いられることもあるが、少年層ではバシのみを用いる。(九)

宮崎・「でも」の den (日記)

鹿児島・(西) basi kazehasi hitato zjanooka (風邪でも引いたのだからか)。

jokanonobasino goto nan zja wagamoto (偉い者でもあるかのよう
に、なんだきさま)。(日記)

鹿児島・(薩) バシ、東京語の軽い指示の「でも」に当り、
後は推量体、疑問体で結ぶが、比況のゴトに連ねて副詞的修飾
法を作る。例、怪我バシシタトヤナカドカイ(……でもしたの
ではないか知らん)。良カバシノゴト、ソゲンコトスナ(良
くでもあるかのようにそんな事をするな)。(日記)

〔など〕

福岡 バシ(久)(井)「などが」、体言ならびに用言の下に
添はりて疑ひの意を表す助辞なり、例へば、私がソゲンイイバ
シシタノといふは「私がそのように言うたことでもあります
か」といふが如き意味にて、ヨンベハ雨バシ降ッタジャローカ
といふは「昨夜は雨などが降ったであろうか」といふ意義なる
が如し。(福方)

熊本・バシ、「又シャ何バシ言ウカ」「顔バシアローテキタラ
ドギャンナ」などと強調して言う時、「バシ」という。時に
は強調の意が強すぎて、「先生デバシアツゴツ」(先生でもない
くせに)のように、一種反語的な非難の意にもなる。「更級日
記」に「釜ばしも引きぬかれなば、いかにすべきぞ」「平家物
語」に「此ればし出しまいらすな」とあり、中世には中央でも
よく用いられたことば。「史記抄」に「我事デバシ アルカト
テ」とある。「デバシ」には、「でもないくせに」の意はまだな
いようだ。(ヒゴ)

鹿児島・nando karimonaNdaa kwaNdo (ちいまいもなん
か食べないぞ) (日記)

〔くらい(だけ)〕

熊本・「ドモ」の離化表現

1、ハヨウメシドンクテスタケシゴツニデニア

(早く飯でもたべて云云)である。この「ドン」は浮世風呂の
西国方言描写にあくどく出ているが、なる程特徴だけはよくと
らえていると思わされる。なくても意味に差支えない、離化的
な着色である。

2、ナンドン考エトラスモネロ。

平安朝の女性の言語によく用いられた原意義を失った「など」の用法にこれに似たのがある。「ドン」は対象をはっきり示さずに、「それら」と包含的に表現する。

3、ツラドマアローテキタカ。

「顔ぐらひは」である。必ずしもその事だけをさしてはいない。大きくそのあたりを指して表現する、「ドモハ」の転とすれば、その結合は奇である。「ドモ」はまだ多分に体言性をもっている。「くらい」「ほど」「だけ」と同性質である。

4、忘レテドマ・クルルナ。

この例では、「だけ」に近い。(ク)

鹿兒島・奄美大島、「ーガール」の形をとる。共通語の「どろーのか」に当る。キャシガカキュル(どんなに書くのか)。キャスンガアタル(どうするんだったか)。島の児童・生徒たちの間に、「共通語」として、「どんなにするんがあつたる」などと話されるのは、方言文法の共通語直訳によるものである。

(11)

〔ほど〕

長崎・ガト・ガトバツカリ 「程・が程・がところ」五銭ガト買ウテキタ(五銭程買ッテ来タ)。一円ガト損シタ(一円が

と・ころ損した)。

「位・ばかり・程ばかり」五十銭ガトバツカリ買オー。五円ガトバツカリヤロオ。(長方)

宮崎・「ほど」の hōzu (日記)

〔まで〕

宮崎・「まで」の mada (日記)

鹿兒島・宮崎南部・ギイとズイ いずれも限定を示す。共通語の「まで」と似た用法を持つ。例、ココズイキツメ(此処まで来て見ろ)。(12)